

河童
相傳
胡瓦
遣

初編

上

10

15

20

25

30

魯文作



曉齋画

萬笈閣梓

河童相傳 胡瓜遺初編自序

此小冊子胡瓜遺と題号する故縁は福澤先生の窮理
 圖解せし高評の音通と借用し實学有益の確論
 と無用の戲編を翻察せる其條河童の尻は等類く
 一度水中小鯽音くと魚水上に浮む則は淡と云ふを消
 るふ同くその河伯氏の好める食や他は有らば則ち胡
 瓜と尻子玉あり尻子玉の人には害ある染好むも
 禁とを許さば胡瓜の風味染ぶ累世の食料たるを

月九日の事

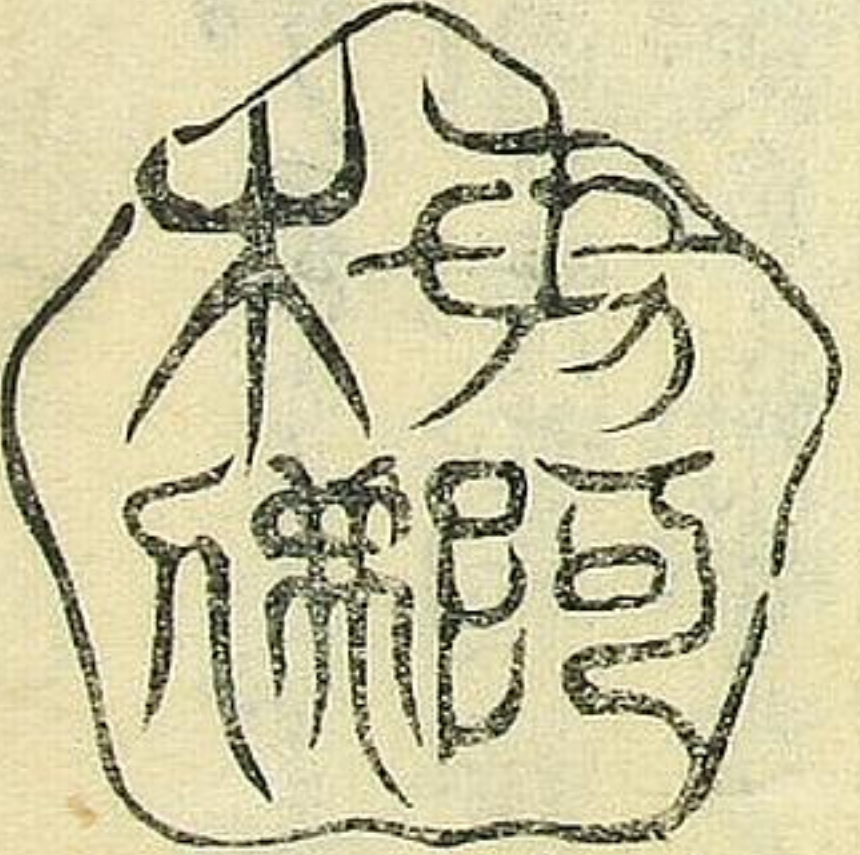
ども生物咀刺齒の外は術をなし當編も既に然り原書
 小同音も題号はあもども理り窮たる説もあつて蒙
 と訓く圖解もたゞ故は河童の傳習とし一名縁此
 の皮とも号り任他滑稽諧や下情導く珉江入
 楚水は浮世の胡氏学平文なりとも捨るるらば
 野甫やも香の物あやしく自田へ水の引語より己
 島は時く種の漫延蔓の一筋は芽出たれ栄を祈る
 とのゑもも八百屋萬の神田小隣もる本石街の萬笈

閣が店賣と祝すふこをあれ

明治第五壬申孟春

花街契應妓塾の流連の間

青陽軒 假名垣魯文記



凡例

一此小冊子翻譯書の表題を借用しと号しきども更し翻譯の躰載を倣ふ専ら通俗の語と用ひ滑稽恢諧を音として理屈を拘つらざる窮理を胡凡附會たるを看く知るべし但し其事河童より傳習たるものあり
 一目次の温氣の章と運氣の事とし空氣の章と食氣の事とし水の章風の章の失張其終は原目と借用せる類あり不知其事ぬ臨み々筆頭思ひ出る隨意の趣向と設く則ち戲述の戲述たる故縁あり

河童相傳 胡凡遺初編上之卷

目錄

○第一章運氣の事 附り開運の身上話

運の天はあり牡丹餅の棚はあれども寝く待つ果報を得る小難し萬民天運の徳を仰ぐべし

○第二章食氣の事 附り下卑の食乱

命の食はあり花より團子の一地球萬事食氣を放まざる人倫の性して一日も綱べつべし

第三章水の事

附り醉狂の放心

狂氣水の酒囊の器は随ふ一様赤面上天の美祿

養老の湧泉も強飲は忽地此理

第四章風の事

附り柳橋の春風

男子色ふ迷へ熱くと逆上煩惱四より湯氣

と發して浮氣の風の原とちなる

第五章雲雨の事

附り遊女の通路

流色の水は深糸の赤繩ふひりれ廓遊ひ虚くら出

たる實より雲とちなり又雨とある

以上

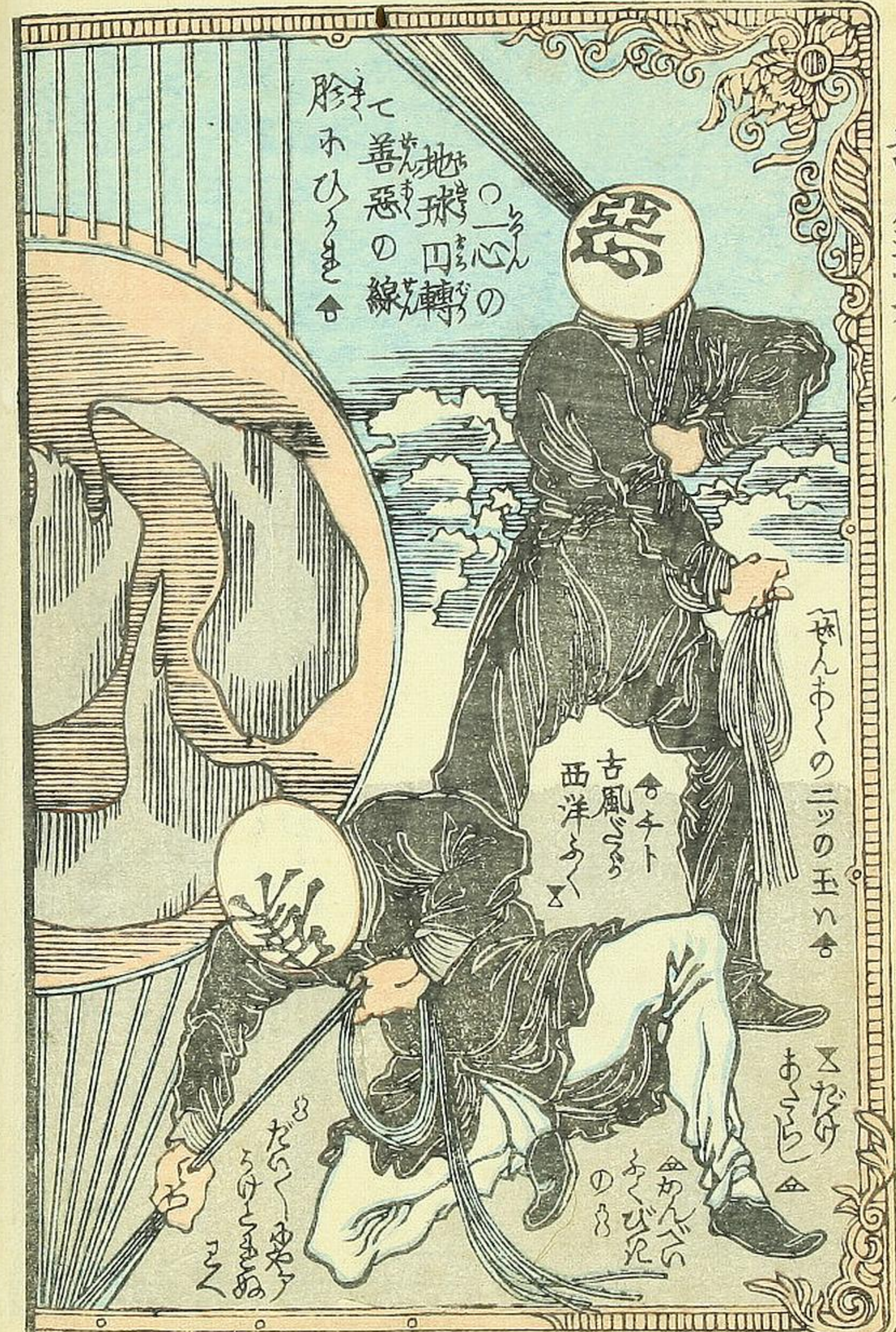
右の原本窮理圖解の目錄は做る事如此猶是は洩たる

第二編の著すを

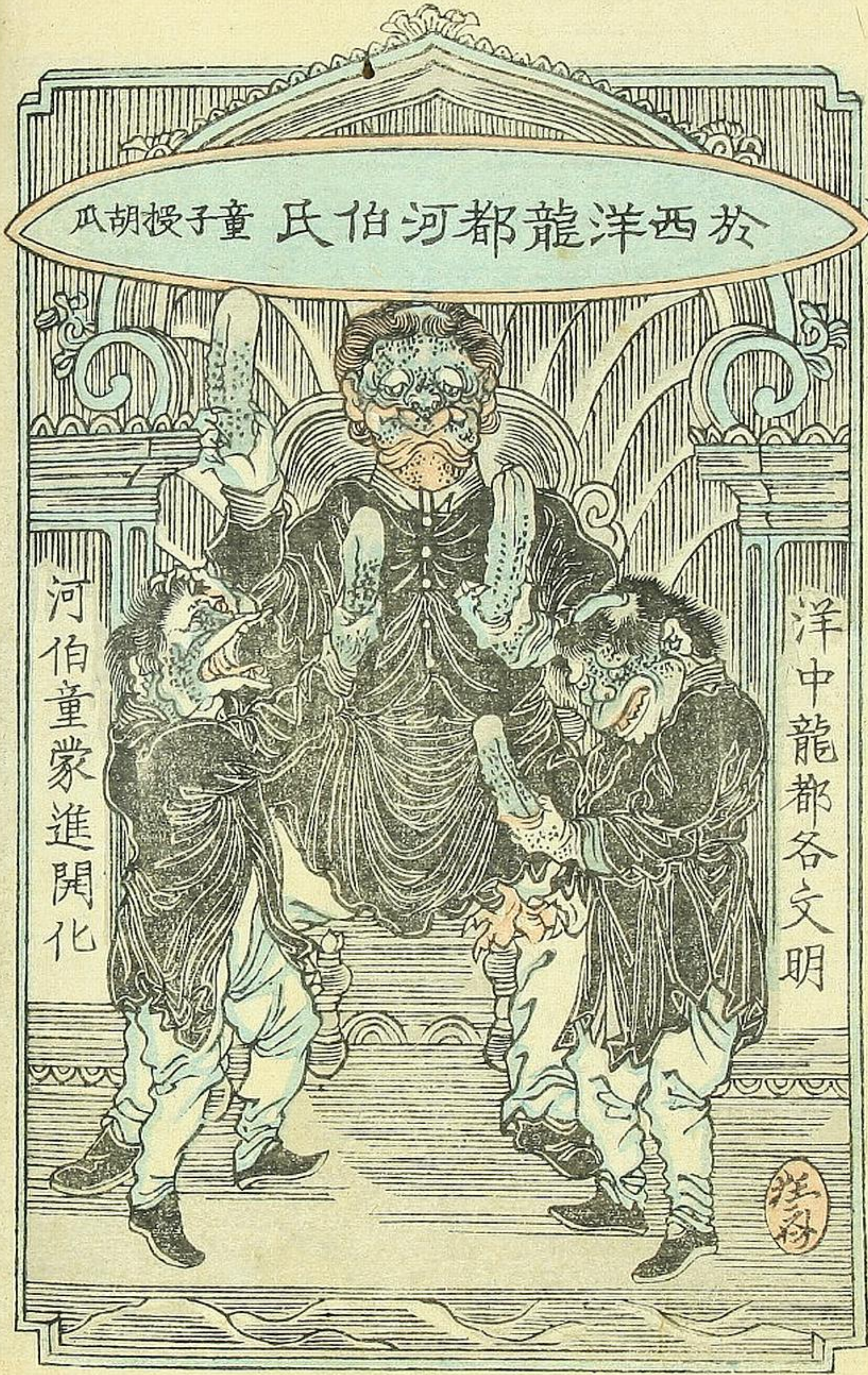
第五大区小五ノ区

浅草諏訪町二戸ノ内三番の借家

善惡坊 假名垣魯文再記



月山遺稿



瓜胡授子童 氏伯河都龍洋西於

洋中龍都各文明

河伯童蒙進開化

河童傳 胡瓜遺初編上之卷

善惡坊

假名垣魯文戲著

第一章運氣之事

世界運氣多きは萬民忍ち縮て小人國の癩咳病の如く生
 涯貧乏神の奴僕となりて借錢の淵に墮入浮む瀬もあるを
 かつぐ。運氣あるはりのく禽獸草木も生育し狗兎も盜門
 の番犬となり。小猪も忠常が臺坐となり。特も大空となり。
 雛鳥も大鵬となり。芋虫毛虫も蝶となり。子子も蚊とな

る類ひ。桃栗三年柿八年。柚子九年。實と結ぶる如き。各々運氣の爲すや。豈仰き尊まざるをけんや。抑運氣の源も。日輪下照と照らし給へば。人の善悪黑白明らふ見通したまふ。故のあり。天道と元と。人心と以て根と。既熊沢先生の金言あり。一切の書を一心の注釈をり。宜あるを運は一心の鏡中。人心整はざるは。寫真鏡に對ひ。身動き。判然と寫る。方今西洋各物窮理の學文行。其

る經驗實學乃御代と変り。孔子や釋迦の迂遠き道は。慶應文明開化日々。み残裁髪頭。九月の栗林の。おとく洋店を軒とを。目印乃旗幡と七夕に竹と。欺く。開知のと。生れ天地の道理を聊ありと。知る。天運あり。人貧福を。身代平等なるを。貧福あり。錢を。思ふ。家富り。若きは貧福を。賢愚より。天の然ら合る。其天

道乃令たゞも善悪邪正は随く余運あり西洋学び
 出来さといふこと己が非を理は論らぬ先商法ご
 相場と計り平和を晴天とめらるゝ結果風雨林雨が
 つゆを能くつと禍ひとまわく草も西洋の西洋を
 知らざる奸商人は運氣を必り何れも人心天は及す
 まば運氣忽地退くあり一切の書は一心の注釈洋書の
 有益成大なるもの一心の注釈よあり身は害あ
 なるものナント子供衆

ト先理屈のやうに戯言を信じて居る人見たる
 ほどこれに窮理を胡亂に擲へる滑稽書
 の發が好(是)から來る人物の洞とある人

○開運の身上話

「イヤ何たのした身よごもあり中のせらるるまア
 有かといふことめの中なる様はさうなりのかりあり大
 勢の者を召仕して各々の異人中の知らぬ結付を
 ちをとりあつてのこごごごり外のサれもあはるる

がほぞんりの通り心茶の東京の日本橋ぐ

煙をくしむ立

らきて

名布

さら夕

河津すのぐ

矢標符を

かりぐく着ん



五寸まのりの

むらゐる痛とこ

せんくく身より分

あゝもゐアな

らゐい日備取ぐ

あつぐがは開港の時分

此地へ流きて来るくサ太田屋躬

田の煙立の土をかつぐ日よら取となきッのグ

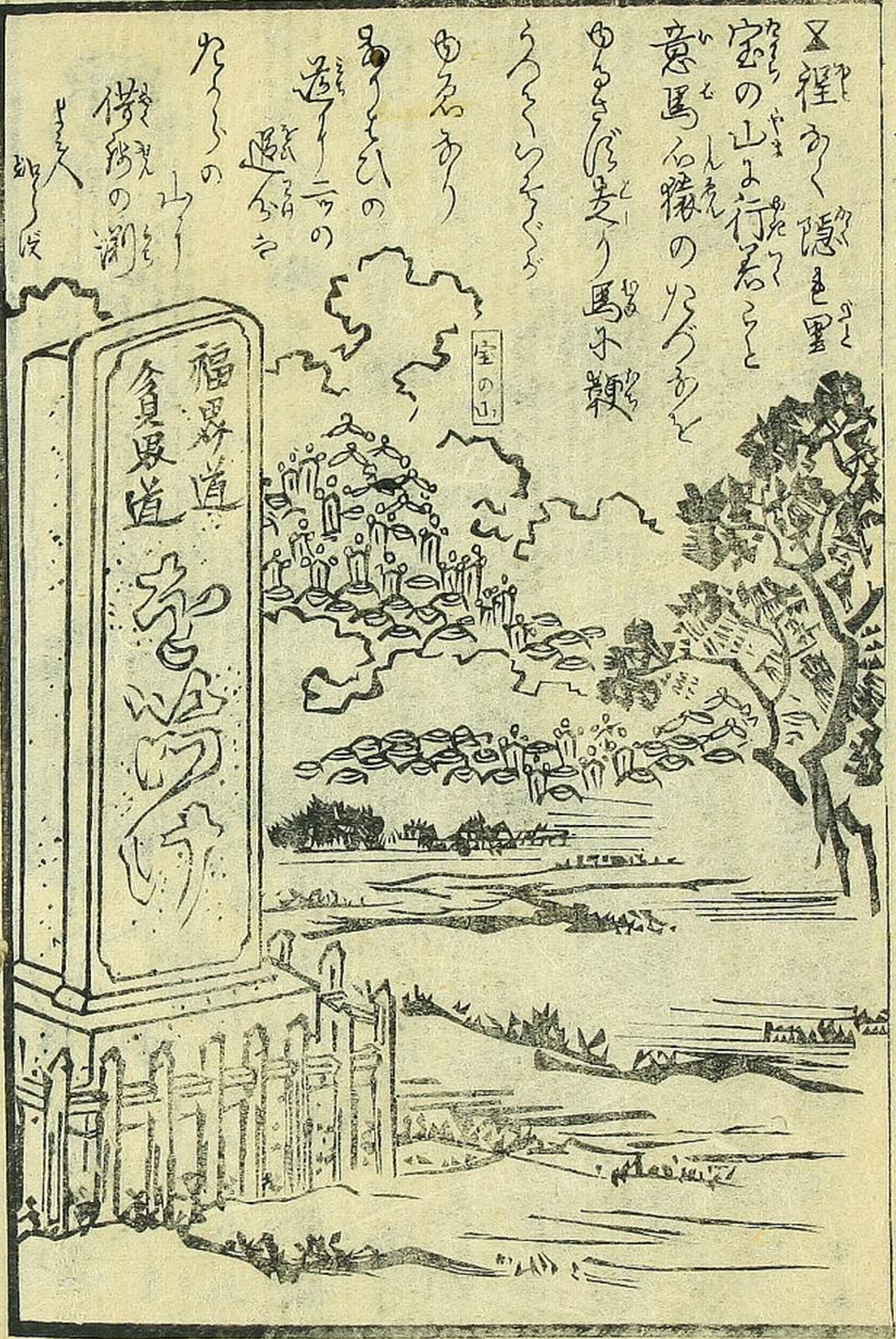


松の運の向いへ揚律サ子毎日く怠らずかせのどく
 わるのうらな國を夏人の目お止するくたのふ幸抱人
 だらうかせぎて人ごころのいられる知くら土方の軒ま
 揺まされて半年をさうり坊あそつとあるうちま嫁
 美物のこま通りのや三通りのでせいの廿か二十の小
 金ゆたくの足くおられるやうふるあつたからこまを
 男ああるところだと思つて一は夏人あめたとせ
 てよまたらいたのどく世をよめ日暮のころのりやのくおま

る一夏人あの中利運をせこののどくから私とこ
 るまののふして世活としてせれるうらも本國はあ
 お夏人が何の中あぬれよ善情の夏人あまらるる
 いのでは雲い橋も波して見ると肝玉とよまて
 そのふまんととあ合つてころう首危よけは遠を
 五箱をうり跡つたと思つてめせその樽金さう帯で下ッ
 たうらチトらんさうのしつが沼山指のゆぐでひ
 僅のうちもよますうばんとさうと枯つてあつたこととひ

と取つてその晩おドルの相場が騰つて又千あむりも
 りりかりのまじりうらごらでるまこと志ありて故郷へ
 戻つて田地の質入ぐもまろく親父の傍ひでも志たり
 先祖の墓でも立流ふ建速とらうりとおつてゐるこ
 羅紗と洋布を積込んで波を異人ごま船へお負
 ろこころあむりかりの形おと種をとと方及らり入たる
 とらふが信念だたら貸るあさいと親を筋うらむ
 込こころらまこから品物引あふこ箱用をたたた





又徑あり隠き里
 宝の山より行若く
 意馬の猿のたぐあ
 むらきば走り馬小鞭
 うらまらそぞろ

ゆゑあり

あつきの

遊一ニラの

遊金

たつきの

備前の湖

山

彼異人とのが又馬の跡をみ敗くともく一亡命と
 ちかく自必脱くつら貧乏金刃の品りの流るる
 と思へ名せば羅紗と津布でちよろくららこまあ
 かりりらかりおのあつらく一旅の上運まるとして高
 法ゆらららばしるの故にやめられぬわうふあつら
 のの當時何本をさくくらす身の上のよ一のわかのほ
 たが實お仕合せる信サ子志し運帆とて申あつら
 兼つてころがけと勉強めよりの申すテねあつら

つまは法ぬかるると此の天理ふるちなるぬはた然の勢
 ませぬテいふ所の指ののぬわつふいふ心けく牡
 降ぐたふもてるやうなる指の目と觸ませぬ
 何も法とあつらふるもあつらふ十元まで人と實働
 ても此の利のまゝまゝと西洋のあはれわと
 ゆすむ方が多イあつらふ一皮盛ラあつらふも
 あつらふ指として元の南流と振編差を在述とし
 たつらふのつらく究極をぬとあつらふイヤとあつらふ

万もことごとくおぼるテ何せんごとく米程堅のさるらん
 ちまよごとく指賃會う有らう航海もあつらひまよが
 どうらう百方の利運てあつらふのちまよならしたごと
 ちまよまよイヤせの中の人指があつらひのちまよならひ
 ちまよららふ運が入らふちまよぬいひていひちまよあつら
 ことごと利とほる業あつらふませつらうらふまよごとく

第二章 食氣の事

人の身體も小天地めし人の腹中は一ツの國なりこの

國王ハ則ち心あり。大臣も氣あり心と氣と元來體分
身あり。耳目鼻口の四つのもは重き官負あり。中
も足と手は重き役目輕き役義と氣と勤勉至ると
りは重き身の人あり。此者共の腰へも下筋の繩
と肩の心の國王是と一の重き拵りて手と勤
うんと心と氣も手の繩とゆるゆる歩日の人とん時
足の繩とゆるゆる皆々心の指揮も從く働く事。鶴役ひ
乃とゆるゆる狙公の如く時節も卯月の初りなり。大道と輕

と呼びて通きなり。耳も聞はけ。口も無性。食たぐり氣
とせしむるは氣元より浮る。此弊習は心よ。勸
るゆと折々なれども心はつと一と諾はざれば食乱
も。食も職あり。職もたふれど。腰國も害あり。食は
命ありとも。過せし命と損ふに至る

古歌曰く

氣も長氣をはるる色も
食細くしてあはれ



獨逸字賣の復字とたのまれくろくありて楮幣
 と博しめあいや此今の食たらく先全日曜日
 塾とを能中一たのぐ七字であつて早朝イカ
 ら何も食ふ物がたあたらぬぐ餘るる焼辛
 と出のたが銅錢のとしたが十文ツ十一錢あつたを
 塗又蓋のよ入目のこふつたあらく丸焼と十
 本へロリ志めこんぢやテをきから橋山町通りを
 東へまきで先の倉の積湯へ飛込で浴室橋へツ

多く茶更の菓子箱をまぐ上の芳くらめくつんと
 辻占の砂糖豆まぶこれぞ若葉のワイフが心を氣
 をるる器拭しやと辻占と拾ひぬるあがらち
 よろくろの豆を十銭とせめてテト後中がゴツ
 と満出しくまこのあは違へふとあめの羊羹
 をこッ四ッやらじたがは甘ま死ぐるあらんら
 荷荷入の扇形を又こッ四ッ食ふたららひふら
 ちりしてきたため人茶あところお各ンで中橋して

月日

日

針へ穿けるは相模屋の墨鏡が如の汁粉の俵を
 穿ひ出したらうら彼知れあつて汁粉が去杯スボケ園を
 を一小尺と置したのぐテ板ふこた人のテおこれ
 うらぶ運動あやと元柳橋うら唐小橋へ立出ると突
 とも十字はびくあつてうら上品祭文の口をを笑ひたり
 故や師の手拭く靴を刺入て人あをたまるのたつてん
 くと橋あつめの二階ふるる際ふ臨んくと生おを脱して
 繪双紙店うら番旦師のまをを馳るうらあつてん

くるおらうら又食ひたくるあのをつたうら何ぞと云
 るたが今朝うら焼芋と甘栗くめで飯をわらあん
 だうらハテ飯の何あたまうら太橋ゆあらず納匠の願
 る敷杖助だレ僕るあぞの大食ゆ安んく俵はく春山
 ある物ふあらずんば満枝愉快ふるらぬうらこのそ
 橋を越へく傍屋のシヤモとひつて向ふも園へ進
 ぶうして傍屋のハウスへ登をまへく皮つたこ人あす
 ぶあすの留り五分葱番の物目こ人あ飯の何備うら

胡地遺物上

十一

大森樓

ありと
弦込で

雀の籠の

昔目を喊らそり

ため矢の狙をくら

蛇まひむきやりくの

鬼娘等の親物とらら

見物一たぐひもやり



むしやりの鬼娘あぞ

も閑化の時常あつ着道

食料どくわん物ぶる知

せねとる人くひびか

物見のあましくら

のを食あてん

せるのくとるる

とまた食氣



づつとてきたるものもひつ張物のむらふ物とのレヤセと
 兼てある本因店の中へ行く牛鍋とこ牧系をこ牧
 と振ぐ一人あつてしてまたく運動あぶくたが
 ひさぐ墨懐角田と遊遊せぬくら約止るのうたへ
 進んで喰の毒へさしかると彼の八百松の橋よ
 同塾の書生達があこ寒とるうふ僕の前をとつら
 けく大声をとあげけく喰がきたが彼奴等の各々
 金満家の厄女ぐるる月の侍と出しく入塾して

居るやうらちわうら附合あてられたまのらぬが先
 方うら招待よるものやうら金針を割たのといら
 ずいさらう押込で食たをすべと招きおぼ
 しく登橋ちてつるると山崎の味噌席よふ埋さく
 杯盤復着のありさるで彼奴等の先刻よの敷板
 と仰けこころ入漬席の飛妓お玉橋おからくふも
 と渡さるぞふ積と探らせと角力も九ひ下のこひ
 よめうららひさるくのらんちるりん海

やらねるわら 盧生が愛でからむらうその盧
 名附は例のそ氣大食の菓の手を止して
 の青のあふ及ぼす他のあゆある吸物うら 椀盛
 取ふ考魚もてむせうやたらふたしけうの食ひ
 ぶゆしての類はちあらしふあらしつけて 膳と
 入合せその情と後走の自己あざら 頓文を後で
 あつこつ人あらし後うら退まがかりのあゆひら
 まらう余途の格と退かてのままらうが 猶ふ酒で

らしろををつんられるやうどやうら 藤足と長中
 寺の山本の店までをつけく茶と一杯呑むと店
 あるあらくある椀解の音がふんと鼻へ通ると
 やうらその候ふえのぐすを死一ツつもむつりのぐ
 追増長とてうふ十四五やらしたるら又あをて進
 ゆて椀場の後りをむらふ人越へる劇を一幕のどい
 たら目と後ふかが入って大ひみ辨解ふるあつこら
 辨解後で他の他食をとんあらしものぐを念ふ劇

を出くて金魂山内きんたまやまのうちにを経歴きんたまして花やりの山やまの山やまで西洋せいようの鏡かがみの銅板どうばんを見たり北きたの窓まどが知ふしるやうな窓まどまるとひやどしたりスリエすりえの曲馬まがうまの着板きりばんをうりを見物ものごをとりとらうく日ひを暮くらうたうらそんぞ入いつらふ入廊いりりやうの氣味きみもあつたが五勢ごせい様の五階ごかい造りわがて街まちの廣ひろくあつたのをいふこところが後ご中ちゆう満まんる様やうでもあつた町まちの秋野あきのをひやしてひよんと知ちきのワイフわいふでもあつたやアあ養やう性じやうで中ちゆう橋きやうまゐるやうあつ

て仕舞しまいをつげらうすると思おもうはるたに入廊いりりやうの事件じけんも防犯ぼうはんと廣ひろくあつたゆゑゆゑを信しんじたが北きたの坂さか次つぎを道みちへかゝると西洋せいようの茶ちや湯とうと紙し燈とうの出でてあるのてハア刷れいの番ばん文ぶんが報ほう録ろくを述べた西洋料理せいようりやうりの小役せうやくをまぐふチヤブちやぶを度どりここの顔かほもあつたといふは北きたの會かい堂どうの對たい面めんもあつたといふは柳やなぎの接せつを居いるといふくハアあつたといふは牛うしの割わりを今いまもあつたといふはこれいしてあつたといふは

胡凡遣初編上之卷

010190522879

胡瓜遺初上

十六

